

銀幕發光：映画伝来とその後の上海放映興行の展開（1897-1924）

その他のタイトル	The Screen Begins to Brighten : Study On Introducing Cinema into China and its Early Stage in Shanghai (1897-1924)
著者	白井 啓介
学位授与年月日	2016-04-28
URL	http://doi.org/10.15083/00074973

白井啓介氏の博士（学術）の学位請求論文『銀幕發光 映画伝来とその後の上海放映興行の展開（1897-1924）The Screen Begins to Brighten Study On Introducing Cinema into China and its Early Stage in Shanghai (1897-1924)』は、清末から民国期にかけて移民都市として急速に発展した上海を取り上げ、映画の伝来とその後の放映実態を実証的に検証し、上海における映画受容の流れとそこから中国映画が生み出されてくる過程を明らかにした労作である。上海がモダンな都市へと変貌を遂げる過程で、映画の受容と発信が果たした役割は大きく、本論考は都市研究としても新たな可能性を示したものとなっている。

本論文の独自性は、ほぼ 30 年分の新聞等の一次資料を調査し、映画関連の記事と広告を網羅した上海映画広告史といえるほどの文献研究の蓄積と、上海の映画館 80 数館をすべて調べ上げた実地調査をもとに、慎重に検討し、緻密な論考に結実させたその実証性にある。これまで民族性や進歩性を軸に語られることが多かった既存の中国映画史では、外国映画が放映興行を独占していた初期の映画史は、個別の事例研究にとどまっていたが、観客がどのような作品を、どこで、どのように見たのか、その外国映画の体験の蓄積を明らかにし、世界映画史との同時代性を実証した本論文は、初期中国映画史の空白を埋めるものであり、より豊かな中国映画史の記述を可能としたという意味で、今後の中国映画史研究に資するところは大きい。

本論文は全九章から構成される。緒論の「晩清期上海の都市形成と娯楽文化——映画受容の社会基盤」では、19 世紀末の上海の都市の形成が概観され、膨張する移民都市における繁華街の形成と娯楽業の展開を跡付ける。出身地域が広範囲に及び、全体に共通する公共言語が成り立たなかった当時の上海では、特定の地域の芸能が優勢を獲得できず、地域性を越えた存在だった京劇とサーカスや手品など言語を媒介としない芸能が娯楽の中心を占め、そこへ見世物としての映画が加わったことが示される。

中国への映画の伝来は、定説とされてきた 1896 年 8 月説に対し、1897 年とする説が出され、現在中国で論争となっているが、第一章「中国への映画伝来」は一次資料の検証を踏まえて 1897 年説を取り、1896 年に上映されたのは幻灯であるとする。続いて第二章「上海映画伝来の実相」では、アメリカ経由で渡来した二組の興行師による演目の分析を通して、1897 年の上海への映画伝来を詳述する。

本論文の中心をなすのは、見世物としてスタートした映画放映が、娯楽の中心として映画館街を形成するにいたる過程を扱った第三章から第五章である。第三章「夜花園の活動影戲」では、1898 年の映画放映の状況を精査し、他のアトラクションとともに露天興行された「夜花園」と呼ばれる郊外庭園での放映の実態と文化空間としての役割が明らかになる。第四章

「活動影戲園の誕生」では、映画放映が徐々に室内に移行し、1908年に常設館が登場する経緯を概観し、アトラクション興行から映画専門の興行への転換が検証される。新聞広告を活用し、興行のスタイルを一新した東京活動影戲園は日本人の経営であり、上海映画と日本の関係を考える上で興味深い。また、存在が知られていなかった映画館をいくつも発掘し、その夭折から当時の興行が抱えていた課題が明らかにされる。第五章「輝く銀幕——影戲院の普及とその放映作品」では、1910年代に映画館街が形成される過程が概観され、それがつねに租界の境界という場末に作られ、租界の拡大とともに繁華街に取り込まれていく経緯が明らかになる。それらの映画館で放映された作品に対する詳細な検討は、本論文の白眉ともいべきもので、第一次世界大戦を挟んで、イタリアの歴史映画やフランスの探偵犯罪ものからアメリカの連続活劇、さらにはスラップスティック・コメディによるスクリーンの独占へと推移する過程が、詳細な放映リストによって初めて実証的に明示された。配給についても調査がなされ、イタリア映画が日本からもたらされた可能性が示唆される。映画館の急増とともに格付けが進み、映画興行が娯楽の中心となっていく経緯が雑誌記事等から跡付けられるが、これについては文学作品等からさらに補強が可能との指摘が審査委員からなされた。

外国映画の受容の蓄積を背景に中国人による映画製作を検証した第六章と第七章では、まず第六章の「中国国産映画の幕開けに向かって——前門の洋画、後門の教育主義」で、定説とされる1905年の北京の豊泰写真館による京劇の撮影の真偽、1913年の上海の亜細亜影戲公司による試行と挫折、1917年の商務印書館影片部の活動が検証され、中国映画が娯楽と社会教育の狭間におかれた状況が詳述される。1905年をめぐる論争で本論文は否定説を取るが、撮影時期は下っても写真館での撮影の可能性を指摘する審査委員とやり取りがあった。第七章「明星影片公司とその作品——本土化 *naturalization* と参照の狭間」は、1922年の明星影片公司設立の経緯と、第一作『劳工之愛情』からヒット作1923年12月の『孤児救祖記』にいたる作品の変化が詳述され、アメリカ映画の参照と模倣に始まる同社の作品が、倫理観を体現する女性の苦難劇という娯楽性と教育主義を両立させるスタイルを確立したことで、中国の国産映画が本格的な幕開けを迎えたと結論づける。

終章「視線の先——その後の研究展望をかねて」では、この初期映画史を受けて、日本映画史との比較や欧米映画を見て育つ世代による中国映画の変容等が課題として提示される。

文献調査に8年、それと平行して行われた実地調査は7回を数えるが、その膨大な蓄積をもとにしつつ、本論文の記述はあくまで慎重であり、先行研究に対する検討を含め、つねに一次資料による検証がなされ、確証の不足するものは推定として注記されるが、提起されなかった事項も散見された。その実証的な態度は重要だが、初期の明星作品に対するバスター・キートンの影響など、今後の研究に期待される事項は、推定の形で明示した方が良かったのではないかという意見が審査委員から出された。索引や放映された外国映画の一覧表の必要性や終章の今後の展望に記述の不足が審査委員から指摘されたが、それらは瑕疵にすぎず、本論文の成果を損なうものではないという点で、審査委員の意見は一致をみた。

したがって、本審査委員は全員一致で、白井啓介氏の提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。